The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	諸葛孔明 : 政治家として
Author(s)	狩野, 直禎
Citation	懐徳. 1984, 53, p. 58-68
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90629
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

諸葛孔明

——政治家として——

狩野直禎

一

諸葛孔明は後世の『三国志演義』などでは、軍師として描かれることが多いのであるが、陳寿の『三国志』では、劉備の謀臣として、さらには蜀漢の丞相として叙述されている。そして陳寿がその評の末尾において

「蓋応変将略。非其所長歟。」

と記していることは、彼の本領が政治の部分にあったことを示している。この陳寿の叙述こそが、孔明の実像に近いものであろう。勿論、後漢末の混乱を生き抜き、三国鼎立の時代にあって、その国是とする漢王朝の再建を実現さすためには、戦闘は不可避であり、必ずしも人材に恵まれぬ蜀漢国にあって、彼が常に軍師として、第一線に出て活躍せねばならぬのが現実ではあったわけだが、それは必ずしも彼の本意ではなかったであろう。彼はむしろ、劉備の蕭何をもって任じていたのではなかろうか。

孔明が自らを蕭何に比していたのではなかろうかと書いたのは、私のあくまで推測に過ぎないのであるが、陳寿の「諸葛亮伝」評に

「可謂識治之良才。管蕭之亜匹矣。」

とあり、同じく「諸葛亮伝」中に載せられている、陳寿の「上諸葛氏集表」に

「亮之器能政理。抑亦管蕭之亜匹也。」

と見えることを頭においてのことでもある。

それはさておき、孔明の政治家としての側面を、彼の

言行にもとずき、或いは他の同時代の人々との比較をしながら、筆を進めていきたい。

二

孔明が故郷の琅邪を去って荆州の隆中に移り、多感の青年期を迎えたのは、一〜二世紀の交であった。それは後漢王朝が党錮の獄以後、政治的に混乱をきわめ、内には黄巾の乱を頂点とする農民の反乱があり、外からは烏丸・鮮卑或いは羌族の侵入、山越・西南夷の動きも活発になり、四百年続いた漢王朝の滅亡が近づいてきていることを、人人が感じ始めた時期である。そして初平元(一九〇)年に、董卓が献帝を擁し、洛陽を焼き払って長安に遷都したことは、漢朝滅亡の決定的な事件として、多くの人の目に映じたことであろう。それではこの現実に対応し、中国世界をどのように導いていくか、経世家をもって任じるものが第一に考えねばならなかった事である。

この時に先ず現れてきたのが、長安への遷都によって、後漢は一旦滅んだと見、同じ劉姓につながるものを推し立てて、漢朝を継続させようというものであった。冀州刺史韓馥、渤海太守袁紹らは白羽の矢を幽州牧の劉虞に立てた。彼が光武帝の子、東海王恭の子孫であり、仁政をなして敬愛の的であったからである。しかし劉虞はこれを辞退した。その理由を劉虞は次のように言う。

「今天下崩乱。主上蒙塵。吾被重恩。未能清雪国恥。諸君各拠州郡。宜共勠力。尽心王室。反造逆謀。以相垢誤邪。」

献帝に代って帝位に即くのは、逆謀とみなしたのである。ところが袁術にいたっては、自ら帝位に即こうと企て仲氏を称するが、これは失敗し(一九七年)、「まさに帝号を袁紹に帰せん」として、道中にて病を発して死んだ。裴注に引かれた『魏書』によると、この時袁術が袁紹に言った言葉の中に、後漢末の混乱を周末の戦国七雄の時代に比定し、袁氏受命に対してはすでに符瑞のあることに触れている。そして袁紹は「陰然之」としたのである。袁術が袁朝の確立を願っていたことが伺える。しかも袁術・袁尚が平素は仲が良くなかっただけに、袁術が死の直前に取った行動には、かえって袁朝確立への執念が感じられるのである。

それはさておき、劉虞擁立の動きや袁術の行動は、献帝を廃するという発想では共通するものがあるが、一方曹操の謀臣荀彧や、袁紹の謀臣沮授の考え方は、むしろ

献帝をもりたてることによって漢朝を再興し、その下で自己の勢力の確立をはかろうとするものであった。この発想は、袁術が仲氏を称する前々年（一九五）のことになるが、董卓が殺された後も（一九二）、董卓の部将たちの下に捕えられていた献帝が脱出して洛陽に帰ってきた現実をふまえて出てきたと考えられる。荀彧は曹操に

「……自天子播越。将軍首唱義兵。徒以山東擾乱。未能遠赴関右。然猶分遣将帥……心無不在王室。是将軍匡天下之素志也。今車駕旋軫。義士有存本之思。百姓感旧而増哀。誠因此時。奉主上以従民望。大順也。……」

と言って、献帝を迎えることが民望に従うことになるとするのである。曹操が荀彧の勧めを採用し、献帝を許より迎えたことが、曹操政権成立の一因となったことは周知の通りである。孔明も天下三分策の中で、

「今操已擁百万之衆。挾天子而令諸侯。此誠不可与争鋒。」

と述べている。荀彧が曹操に献帝を迎える様勧めたのとほぼ同じころ、沮授も亦た袁紹に次のように説いている。

「将軍弱冠登朝。則播名海内。値廃立之際。則忠義奮発。単騎出奔。則董卓懐怖。済河而北。則勃海稽首。振一郡之卒。撮冀州之衆。威震河朔。名重天下。雖黄巾猾乱。黒山跋扈。挙軍東向。則青州可定。還討黒山。則張燕可滅。回衆北首。則公孫必喪。震脅戎狄。則匈奴必従。横大河之北。合四州之地。収英雄之才。擁百万之衆。迎大駕於西京。復宗廟於洛邑。号令天下。以討未復。以此争鋒。誰能敵之。比及数年。此功不難。」

とあって、献帝を迎えんことを言うのであるが、紹は喜んで、

「此吾心也」

と答えながら、結局その意見を採用せずに終った。裴注に引く『献帝伝』には、袁紹が沮授の勧めを受け入れなかったのは、郭図・淳于瓊の説に左右されたからであるとする。では郭図らの意見はどのようであったか。

「漢室陵遲。為日久矣。今欲興之。不亦難乎。且今英雄拠有州郡。衆動万計。所謂秦失其鹿。先得者王。若迎天子以自近。動輒表聞。従之則権軽。違之則拒命。非計之善者也」

これはすでに漢の復興を不可能とし、実力で中原に鹿を逐うべきで、献帝を迎えればかえって自由な行動の妨げになるというのである。これに対し沮授は重ねて、

「今迎朝廷至義也。又於時宜大計也。若不早図。必有先人者也。夫権不失機。功在速捷。将軍其図之。」

と説いたが、袁紹はついに授の勧めを受け入れず、曹操に先んじられてしまったのである。しかも袁紹は「曹操が天子を迎えて許に都し、河南の地を収めて、関中が皆附した」のを後悔し、「曹操に令して天子を徙して甄城に都させ、自らも天子に近づこう」としたが、曹操から拒絶された。

後漢王朝の崩壊は誰も見る所で、すでにその実体は消滅しようとしているが、なお残っている名を利用せんとするのが、荀彧・沮授の考え方であった。それに対して郭図らは、実体の崩壊した以上、その持っている名に執着するのはよくないとしたのであり、袁紹が最初は沮授の献帝迎立の説を聞いて「此吾心也」と喜びながら、袁術から帝号を帰そうと言われて、「陰然之」とした心の変化の兆しが、袁紹の行動に見られるのではなかろうか。なお沮授は、袁紹・曹操の官渡の戦いの際にも、

「……宜先遣使献捷天子。務農逸民。若不得通。乃表曹氏隔我王路。然後進屯黎陽。……、三年之中。事可坐定也。」

「蓋救乱誅暴。謂之義兵。恃衆憑彊。謂之驕兵。兵義無敵。驕者先滅。曹氏迎天子。安宮許都。今与師南向。於義則違……今棄万安之術。而興無名之兵。窃為公懼之。」

などと言い、曹操が献帝を許に迎えたことにより、いわば勤王の軍になってしまったことを意識して意見を述べている。

それでは荀彧なり沮授なりが、献帝を自陣に迎え、自軍の勢力が強大になったあとのプログラムをどう考えていたのだろうか。沮授の場合は彼の意見は採用されず、彼自身も官渡の戦後曹操に捕えられて殺されてしまったので、全く知る事ができないが、荀彧の場合は後になって（三二年）、曹操が魏公に進められようとして、それを受けるか否かをひそかに彧に問うた時、

「彧以為太祖本興義兵。以匡朝寧国。秉忠貞之誠。守退譲之実。君子愛人以徳。不宜如此。」

としたので、曹操は心平ぐ能わず、ついに彧を死に追い込んだ。そして彧が死ぬと明年、魏公に進んだのであった。とすれば彧は漢朝を簒奪するようなことは考えていなかったものの如くである。

それでは孔明の「天下三分の計」はどうであったろうか。これは現実の分析から始って、将来の見通しにいた

るまで、首尾整った計策であるということができる点で、荀彧・沮授を上廻る。

孔明が劉備に「三顧の礼」をもって迎えられ、「草廬対」即ち「天下三分の策」を献じたのは、建安十二年（二〇七）の事であり、曹操が献帝を許に迎えてから十一年、官渡の戦から数えて七年後であり、曹操による華北平定はほぼ完成していた。ちなみに曹操が冀・青・幽・并の四州を占領したのは、建安十年（二〇五）の事である。しかも江東に目を移すと、孫氏によるこの地域の支配はほぼ確立していた。したがって孔明は天下はもはや統一より分裂に向っていっていることを感じとっていたのではなかろうか。

同じようなことをすでに魯粛が考えていた。魯粛は建安五年（二〇〇）、孫権が兄孫策の死によって、孫氏の頭領になった時に、権の部下に入ったようであるが、初めて孫権と面語した時に、

「粛窃料之。漢室不可復興。曹操不可卒除。為将軍計。惟有鼎足江東。以観天下之釁。規摸如此。亦自無嫌。何者北方誠多務也。因其多務。勦除黄祖。進伐劉表。竟長江所極。拠而有之。然後建号帝王。以図天下。此高帝之業也。」

と言っている。魯粛ははっきりと漢室の復興は不可能であることを述べ、やはり天下三分を説くが、最終的には孫氏による天下統一を考える。しかも魯粛は孫権に推薦したのは周瑜であるが、魯粛が孫権に会いにゆく前に周瑜が魯粛と交した言葉の中に

「吾聞。先哲秘論。承運代劉氏者。必興於東南。推歩事勢。当其歴数。終搆帝基。以協天符。」

とあり、周瑜――彼はすでに孫策の時代から、孫氏に仕えていたが――は漢の滅亡を当時流行の符瑞を挙げて予測している。袁術に通ずる発想である。そしてかえって孫権の方が

「今尽力一方。冀以輔漢耳。」

と、荀彧・沮授的な答を魯粛にしているのである。

それはさておき、魯粛の場合は孔明より九歳の年長であった事もあるが、孫権という主君を得て、その抱負を実行に移す機会が与えられたのであるが、孔明にはまだその機会はなかった。孔明が住んでいた隆中は荆州に属し、荆州の牧は劉表であるが

「荆州……此用武之国。而其主（劉表）不能守。」

という状態で、仕うるに足りる人物とは、孔明の目に映らなかったのである。そこに前漢景帝の子、中山王勝の

子孫を名乗る劉備が現われ、孔明を礼を尽して迎えたのであるから、彼れの天下三分策は実現の見通しがついた上に、劉氏による天下再統一を最終の目標とする、大義名分が附加されたのである。周知のように、

「誠如是則覇業可成。漢室可興矣。」

というのが、天下三分策の結びの言葉である。魯粛の立場が袁術的であったとすれば、孔明のそれは劉虞擁立者と似通ってくる。以後劉備による天下再統一が、彼のテーマとなる。出師表にも、

「当奨率三軍。北定中原。庶竭駑鈍。攘除奸凶。興復漢室。還于旧都、此臣所以報先帝。而忠陛下之職分也。」

といっている。

三

次に孔明は政治家の理想として、どのような人物を脳裏に描いていたであろうか。蜀志五「諸葛亮」伝には、

「亮躬耕隴畝。好為梁父吟。身長八尺。毎自比於管仲楽毅。」

と見える。梁父吟は故郷山東の民謡であるが、その内容は春秋末、斉の景公の宰相晏嬰が、二桃をもって三士を殺し、斉国内を安定させた話であるという。管仲はいうまでもなく斉の桓公を助けて、中国最初の覇者たらしめた人物であり、彼が自らを王者の佐をもって任じていた事がわかる。その事はこれも裴注引「魏略」に見える有名な逸話

「亮在荊州。以建安初。与潁川石広元、徐元直、汝南孟公威俱游学。……毎晨夜従容。常抱膝長嘯。而謂三人曰。卿諸人仕進可至郡守刺史也。三人問其所志。亮但笑而不言。」

からも分る。

楽毅はいかなる人物であるか。戦国時代に、燕の昭王が「隗より始め」て人材を集めた時、魏から燕に赴き、燕の将軍となって斉に攻め込み、斉は莒と即墨を除き、すべて燕に降伏してしまった。斉からみれば憎き敵将となるのに、何故孔明が自らを楽毅に比したのか。同じ戦国時代の将軍ならば、廉頗もいるではないかということになるが、孔明の「出師表」と楽毅の「報燕王書」が名文として臣子たるものの鑑とされたことから生れた逸話ではなかろうか。滝川亀太郎博士は

「出師表実得力於此文（報燕王書）尤多。」

と言っておられる。（史記会注考証　楽毅伝）またそうしたこととは別に、管仲・晏嬰、楽毅などは、一つの宰相・

将軍の行動のモデルとして、漢以来いろいろな場合に取上げられる人物でもあった。そういう意味では、陳寿が「管蕭の亜匹」とした蕭何も同様である。現に呉の張昭は甘寧から

「国家以蕭何之任付君。」

などと言われている。

ところで孔明と同時代人が、孔明が自らを管仲楽毅に比したように、自らを先人に比した例があるかというと、曹操が「短歌行」の中で

「周公吐哺。天下帰心。」

と、周公に比した例しかないようである。

次に少し観点を代えて、孔明が後主劉禅に送った書物についてみてみたい。一般に他人に書物を推薦するということは、その人物の人生観、価値観に深く関わると思うからである。

「諸葛亮集載 先主遺詔。勅後主曰。……可読漢書礼記。閑暇歴観諸子及六韜商君書。益人意智。聞丞相為写申韓管子六韜一通。已畢。未送。道亡。可自更求聞達。」

この前半は劉備が直接劉禅に読むことを勧めたものであるが、後半には孔明が劉禅のために書写したもののリストである。これがすべて法家・兵家に属するものであることが注目される。その点劉備が子供に読ませようとしたものも、六韜、商君書といった法家・兵家のものもあるが、漢書、礼記そして諸子と広い方面に及んでいる。これをさらに曹操と較べるとどうであろうか。

「典論帝自叙曰。……余是以少誦詩論。及長而備歴五経四部史漢諸子百家之言。靡不畢覧。」

曹操は息子の曹丕に詩経、論語を先ず誦させ、長ずるに及んで五経、史記、漢書、諸子百家から集部に及ぶまで、広く四部の書を読ませて、教育にも十分の注意を払っていることがわかる。一方孫権は呂蒙・蔣欽に読書を勧めて、次のように言っている。

「江表伝曰。初（孫）権謂（呂）蒙及蔣欽曰。……孤少時。歴詩書礼記左伝国語。惟不読易。至統事以来。省三史諸家兵書。自為大有所益。……宜急読孫子六韜左伝国語及三史……。」

これは孫権自身の読書の遍歴であると同時に、呂蒙らに読書を進めたものであるが、劉備・孔明・曹操と比較した場合、細い点では出入りがあるが、経史と兵家の書がとりあげられているという点では、そう大きな違いはないように思う。孫権が兄の孫策から、

「挙賢任能。各尽其心。以保江東。我（孫策）不如卿（孫権）。」

と言われたのも、もっともなように思える。孔明が劉禅に送ろうとしたものが、法家・兵家に限られているのは、ある程度彼の考え方をはっきりと示しているが、これをもって孔明の学問の全てと見られない事、言うまでもあるまい。

なお蛇足を加えれば、呂蒙は孫権から言われた通り読書にはげんだので、魯粛から

「吾謂。大弟但有武略耳。至於今者。学識英博。非復呉下阿蒙。」

と話しかけられるに至った。

四

「忠信を主とせよ」「信なくんば立たず」

これらは孔子の言葉であるが、政治家にとって、まごころをつくし、他人から信頼をかちとることは一番大切な事である。

忠については「出師表」の一文につきるであろうから、ここではこれ以上ふれない。

孔明が劉備を始めとして蜀の人の信頼を得ていたことも、改めて説くまでもない。いまいくつかの例をあげれば、第一に劉備が白帝城において没せんとする時、

「君才十倍曹丕。必能安国。終定大事。若嗣子可輔輔之。如其不才。君可自取。」

と言ったのは孔明を全面的に信頼しての言である。論語にも曾子の言として、

「曾子曰。可以託六尺之孤。可以寄百里之命。臨大節而不可奪也。君子人与。君子人也。」

とあるように、孔明は君子人として評価され、信頼を受けていたのである。これに対して、孔明は涕泣して言った。

「臣敢竭股肱之力。効忠貞之節。継之以死。」

孔明の「忠」の気持ちを示す言葉である。もっとも「張昭伝」を見ると、孫策は張昭に弟の孫権の輔佐を頼んだのであるが、裴注に引く「呉歴」には

「策謂昭曰。若仲謀（孫権）不任事者。君便自取之。」

と見え、劉備孔明と同じ関係を記している。賢才主義から出発して、このような言を発する風潮があったのであろうか。「君便自取之」といった極端なものではなくても、新しい君主が立つと、必ず何人かの輔佐をする者が指名されるのがこの時期の通例であった。すなわち劉禅

即位の場合も、諸葛孔明と李厳が選ばれたのであり、呉の孫権の時には張昭だけが指名されたようであるが、周瑜伝には、

「策薨。権統事。……以中護軍与長史張昭。共掌衆事。」

と見え、張昭・周瑜らが先ず側近として輔佐したようである。また孫権は死に際して皇太子の孫亮を諸葛恪と滕胤に託した。

魏ではどうであったろうか。曹操が没して曹丕が即位した時には、特に輔佐役を指名することはなかったが、曹丕は臨終にあたって中軍大将軍曹真、鎮軍大将軍陳羣、征東大将軍曹休、撫軍大将軍司馬懿の四人に遺詔して明帝を輔佐させた。そして明帝の臨終にあたっては、この輔佐者を誰にするかということで、最初は大将軍燕王の曹宇、領軍将軍夏侯献、武衛将軍曹爽、屯騎校尉曹肇、驍騎将軍秦朗を考えていたところ、結局は曹爽と司馬懿の二人が斉王芳を輔佐することになった。

こうした場合、輔政者の間から権力を握って国政を左右するものが現れたり、或は輔政者間の対立が起こって、国力を衰退させることもあるのである。魏の場合、司馬氏が実力を握ってやがては晋朝を建てるに至るのである。

ところで孔明と李厳の関係も微妙であった。裴注には諸葛亮集を引いて次のように言っている。

「諸葛亮集。有厳与亮書。勧亮宜受九錫。進爵称王。亮答書曰。吾与足下相知久矣。可不復相解。足下方誨以光国。戒之以勿拘之道。是以未得黙已。吾本東方下士。誤用於先帝。位極人臣。禄賜百億。今討賊未効。知己未答。而方寵斉晋。坐自貴大。非其義也。若滅魏斬叡。帝還故居。与諸子並升。雖十命可受。況於九邪。」

李厳は孔明に九錫を受け、王を称せというのであるから、これは禅譲＝簒奪の前段階になる。孔明は勿論これを受けつけず、やや諧謔をもうけてことわっている。そして以後李厳は孔明の北征にあたって、食糧の補給を命ぜられながら、それに違反するなど反抗的態度を取ることになり、ついに廃されて平民におとされ、梓潼郡に徙されたのである。

信といえば「泣いて馬謖を斬り」、自らも街亭の戦の敗北の責を取って、上疏して「自貶三等。以督厥咎」するとともに右将軍行丞相事となって、信をつないだのである。

次に彼れが清廉をもって身を持したことについて触れておこう。諸葛亮伝には、

「初亮自表後主曰。成都有桑八百株。薄田十五頃。子弟衣食自有余饒。至於臣在外任。無別調度。随身衣食。悉仰於官。不別治生。以長尺寸。若臣死之日。不使内有余帛。外有贏財。以負陛下。」

と記す。桑田八百株、薄田十五頃というのが、果してどれ位の財産になるかは、よく分らないが、晋武帝の占田課田制の下にあっては、十五頃は八品官の占田額となるから、丞相の私財としては軽少というべきであろうか。そして彼が死んだ時は、彼のいう通りであったという。

なお清廉という点では『三国志』に他に比較する人物は見出し得ない。

五

最後に孔明の内政・外交はついて、述べておきたい。「富国強兵」という言葉があるが、三国鼎立の折から、富国強兵は至上命題であったろう。ただ蜀漢の土地制度や兵制など、あまりくわしい事は分っていない。

魏は屯田（民屯及び軍屯）を施行して、農業生産力の増大を図ったのであるが、蜀も孔明が建興九年（二三一）に木牛、十二年（二三四）には流馬を作り食料の供給を図ったが、十分にその効果が現れなかったので、渭浜の地（魏との交戦地域）に屯田を開いたことが見えるが、これはあくまでも国境地帯における軍屯であって、蜀全体に広げて考えることはできない。

四川の地はすでに先秦のころより、天府の国として、豊かな土地であったが、とくに此の地の特産品として、塩、絹織物、漆器などがあげられる。

「王連伝」には

「遷司塩校尉。較塩鉄之利。利入甚多。有裨国用。」

「呂乂伝」には

「先主定益州。置塩府校尉。較塩鉄之利。」

とあり、塩鉄の専売を行って、国家財政に裨益する所が多かったようである。また「張裔伝」には

「為司金中郎将。典作農戦之器。」

とあり、漢の工官の如きものを設けて、農具・武器を作らせた。これらはおそらく孔明の指導の下に実行されたものであろう。なお「諸葛亮集」には、

「今民貧国虚。決戦之資。唯仰錦耳。」

ともいっている。

兵制についても、魏では兵戸制がしかれ、呉でも奉邑

制、世兵制などが施され、兵士の供給には兵戸が設けられたようであるが、蜀についてはやはりよく分らない。しかし、「出師表」に、

「五月渡瀘。深入不毛。今南方已定。兵甲已足。」

とあり、また「華陽国志」に、

「涪陵郡。蜀丞相亮発其勁卒三千人。為連弩士。遂移家漢中。鄧芝移其豪徐薗謝范五千家於蜀。為猟射官。」

「移南中勁卒青羌万余家於蜀。為五部。置五部都尉。今其羸弱。配大姓。為部曲。」

とあり、外人部隊も活躍したようである。

次に孔明の人材登用の原則についてふれてみよう。蜀は河北に生れた劉備が荆州に移りここで勢力を蓄えて益州（四川）に入って来たので、その人脈も張飛・関羽・趙雲のように河北から備に従ったもの、荆州時代に配下に入ったもの、益州土着のもの、それも劉焉・劉璋の部下であったもの、そうでないものと複雑である。孔明はそれらを和合させながら、人事の配置、人材の登用を行ったのであるが、基本的には才能を重視するものであったといえよう。「出師表」にも、

「親賢臣。遠小人。此先漢所以興隆也。親小人。遠賢臣。此後漢所以傾頽也。先帝在時。毎与臣論此事。未嘗不歎息痛恨於桓霊也。」

とあり、また表中に取り挙げた人物（郭攸之、費禕等）やそれらの人物への評価、また彼が五丈原における臨終の折、李福の質問に答えて、自身なき後頼るべき人物を挙げる所などに見ることができる。

次に彼が気をつけたことは信賞必罰であった。馬謖を斬ったことが一つの有名な実例であるが、「出師表」にも

「宮中府中。俱為一体。陟罰臧否。不宜異同。若有作姦犯科。及為忠善者。宜付有司。論其刑賞。以昭陛下平明之理。不宜偏私使内外異法也。」

と言っている。

最後に外交であるが、彼れは「天下三分策」に、

「孫権拠有江東。已歴三世。国険而民附。賢能為之用。此可与為援。而不可図也。」

と言って以来、一貫して呉とは同盟して魏に当るべしという論者であった。これも彼のすぐれた政治家としての資質の一であろう。

（附記）本稿作成に当っては、平木康平「政治家――諸葛孔明（加地伸行編「諸葛孔明の世界」新人物往来社）を参考にすること多かった。

（京都女子大学教授）